

英語の非接触動詞の外的所有者構文について

武本 雅嗣

1. はじめに

インド・ヨーロッパ語族には、譲渡不可能所有 (inalienable possession) がかわる外的所有者構文 (external possessor construction 以下 EPC) をもつ言語が多い。次の (1) (2) (3) は構造的に対応するフランス語と英語であるが、英語には (1) のような所有者を属格で標示する内的所有者構文 (internal possessor construction 以下 IPC)¹ と (2) のような対格タイプの EPC はあっても、(3) のような与格タイプの EPC はない²。

- (1) a. Marie a saisi **son** bras.
Marie has grabbed his arm
'Marie grabbed his arm.'
- b. Mary grabbed **his** arm.
- (2) a. Marie **l'** a saisi par le bras.
Marie him:ACC has grabbed by the arm
'Marie grabbed him by the arm.'
- b. Mary grabbed **him** by the arm.
- (3) a. Marie **lui** a saisi le bras.
Marie him:DAT has grabbed the arm
'Marie grabbed his arm.'
- b. *Mary grabbed **him** the arm.

インド・ヨーロッパ語族において英語は、オランダ語やウェールズ語などとともに、与格タイプの EPC を持たない少数派の言語である³。ただ、現代英語にもかつての EPC の名残と思しき表現がある。それは、動詞 look や stare が、前置詞句内の身体部位名詞の所有者を目的語としてとるものである。これらの非接触動詞から成る EPC は、(5) のように身体部位名詞を含む前置詞句が不可欠な要素であるという点で、(4) のような純然たる他動詞である接触動詞 punch や headbutt で構成される EPC とは異なっている。

- (4) Mike { punched / headbutted } **his opponent** (in the face).
(5) Mike { looked / stared } **his opponent** *(in the face).

¹ フランス語では所有形容詞が、英語では所有格が属格の機能を担っている。

² これらの異なる構文は事態の異なるの捉え方を反映している。意味の相違については武本 (2003) を参照されたい。

³ 英語のこの特異性はケルト語の影響によるものとみる研究者が少なくない。See König & Haspelmath 1998, Haspelmath 1999, Vennemann 2002, Filppula & Klemola 2014, Allen 2023.

同様に単独では人間名詞を目的語としてとらない非接触動詞の smile や whisper は IPC でしか用いられないので、非接触動詞の中でもこれらの視覚動詞の EPC はやはり特殊である。

- (6) a. She looked in **his** eye(s).
b. She looked **him** in the eye(s). (cf. *She looked **him**.)
- (7) a. She smiled in **his** face.
b. *She smiled **him** in the face. (cf. *She smiled **him**.)
- (8) a. She whispered in **his** ear.
b. *She whispered **him** in the ear. (cf. *She whispered **him**.)

ただ、シェイクスピアやベーコンの時代には、(7b) や (8b) のような EPC は非文法的ではなかった（以下、引用例中の太字はすべて本稿筆者による強調）。

- (9) He smil'd **me** in the face, raught me his hand, (Shakespeare 1599, *Henry V*, Act 4, Scene 6, Folio 1, 1623)
https://internetshakespeare.uvic.ca/doc/H5_F1/complete/index.html
- (10) I told him, as was true; That he did firft whisper **the Man** in the Eeare, that fuch a Man fhould thinke fuch a Card: (Francis Bacon 1623, *Sylva Sylvarum, Or, A Naturall Historie: In Ten Centuries* (1639), p.207) (Google Books PDF)⁴

では、(6b) のような英語に現存する EPC および (7b) (8b) のような近代まで存在した EPC は与格型と対格型のどちらのタイプなのだろうか。また、なぜそれらの非接触動詞の EPC があって、他の類義の非接触動詞の EPC はなかったのか。そして、なぜかつて可能だった EPC のごく一部だけが今日まで存続することになったのか。本稿では、非接触動詞の種類ごとに事例を観察して分析を行い、これらの疑問の解明を試みる。近年、EPC については、個別言語における研究だけでなく、対照言語学的研究や通言語的研究も盛んに行われており、英語に関しては、歴史的な観点からの非常に興味深い研究もなされている。先行研究から得られた知見を援用して、とくに単独では人間名詞を目的語としてとらない英語の非接触動詞の EPC について、格を保持するドイツ語・フランス語の EPC と対照しつつ、共時的かつ通時的に考察していく。

2. 古英語期の与格型 EPC の消失

本論に入る前に、まず歴史的事実をおさえておく。今のドイツ語のように4つの格（主格、属格、与格、対格）を有していた古英語には様々な与格の用法

⁴ Google Books の PDF で公開されている文献からの引用については、URL からの直接アクセスが不可能になっているので、それぞれの URL の記載はしていない。

があった。ここではとくに、動詞が指定しないにもかかわらず身体部位の所有者を属格ではなく与格で標示する EPC の例を Allen (2019) から引用して示すことにする。(11) は身体部位名詞が主語の場合、(12) はそれが目的語の場合(この場合の動詞はほとんどが剥奪動詞 (verbs of depriving)), (13) はそれが前置詞の目的語の場合である。

- (11) & **him** se maga micla þindeþ
 and him:DAT the:NOM stomach:NOM greatly descends
 'and his stomach is greatly distended' (colaece, Lch II_[2]:51.1.2.3104) (Allen 2019: 74)
- (12) Seo cwen het þa ðæm **cyninge** þæt heafod of aceorfan
 the queen ordered then the:DAT king:DAT the:ACC head:ACC off cut
 'the queen then ordered the king's head cut off' (coorosiu, Or 2:4.45.6.852) (Allen 2019: 69)
- (13) a. & hy crupon **þæm** mannun betuh ba þeoh
 And they crept the:DAT.PL men:DAT.PL between the thighs
 'and they (the fleas) crept between men's thighs' (coorosiu, Or_1:7.25.23.493)
- b. **him** stod sweflan lig of þam muðe
 him:DAT issued sulphurous flame from the mouth
 'A sulphurous flame issued from his mouth' (cocathom1, +ACHom_I_5:221.135.1007)
- c. gif he sie **men** on cneowe
 if it:NOM is:OPT one:DAT on knee
 'if it is on a person's knee' (colaece, Lch_II_[3]:59.1.1.4046)
- d. Þa dyde Martinus on muð **þam** wodan his agene fingras,
 then put Martin in mouth the:DAT mad:DAT his own fingers
 'Then Martin put his own fingers into the madman's mouth' (coalive, +ALS_[Martin]:540.6315) ((13a-d): Allen 2019: 95-96)⁵

本研究に直接関係している与格の用法は「身体部位名詞が前置詞の目的語になっている場合」であるが、現代英語では (13) の EPC はすべて明らかに非文である。ただ、それらと比べると絶対に使用不可とまでは言えなさそうな EPC も古英語にあった。それは、人間名詞をとるには現代英語では前置詞 *at* ないし *on* を要する動詞 *spit* の EPC である。

- (14) ðonne hie **him** on ðæt nebb spætton.
 when they him:DAT in the face spat
 'when they spat in his face' (cocura, CP:36.261.7.1700) (Allen 2019: 55)

このような *spit* の EPC での使用は、古英語期が終わったとたんになくなった

⁵ Allen (2019: 60) は、若干珍しいが (13d) のように与格外的所有者が所有物に後置されている例もあることを指摘している。

わけではなく、代名詞の与格と対格が次第に融合していった中英語期までもう少し、少なくともその初期までは生き延びていた。

(15) þenne spit leccherie to scheome & to schendlac; **meiðhad** o þe nebbe.
then spits lecherie to shame and to disgrace maidenhood in the face
'Then lechery spits in maidenhood's face, to shame and disgrace' (CMHALI, 139.167) (Allen 2019:186)

(16) spet **him** amidde þe bearde
spit him (DAT) in-the-middle-of the beard (ACC)
'spit into his beard!' (Ancrene Riwe 131 [first half of 13th c.]) (Mustanoja 1960: 98)⁶

しかし、近代英語期には spit は EPC で用いられなくなっていたようで、次のような使用例はごくわずかしみられない。

(17) I should have spat **them** in the face, And spurn'd them every one. (Miller, Cincinnatus Hiner. 1871. *Songs of the sierras*, by Joaquin Miller. p.170) (Google Books PDF)

現代の標準英語ではこの動詞は IPC でしか用いられず、EPC での使用は不自然である。しかしながら、与格を保持しているドイツ語やフランス語はもとより、英語同様与格を喪失している北ゲルマン語のノルウェー語やスウェーデン語でも、また西ゲルマン語のオランダ語でもその相当語は EPC をとりうる。ゲルマン語の例を示す。

(18) a. [英語]

??She spat **him** in the face. (Eik 2014: 28)⁷

b. [ドイツ語]

Sie spuckte **ihm** ins Gesicht.
she spat him:DAT in-the.ACC face
'She spat in his face.'

c. [ノルウェー語]

Hun spyttet **ham** i ansiktet.
she spat him him in face:DEF
'She spat in his face.' (Lødrup 2019: 563)

d. [スウェーデン語]

Hon spottade **honom** i ansiktet. (Lundquist & Ramchand (2012:228) の例を改変)
She spat him in face.DEF
'She spat in his face.'

⁶ Mustanoja (1960) は引用文の him を「与格」としている。

⁷ 容認性も含めて Eik (2014: 28) からの引用。

e. [オランダ語]

Ze spuugde **hem** in het gezicht. (Hüning (2008: 45) の例を改変)⁸
 she spat him in the face
 ‘She spat in his face.’

このことは、与格の有無と EPC の有無は必ずしも合致しているわけではないということの意味する⁹。

英語では、古英語期にあった与格標示の EPC は与格と対格が融合した中英語期以降一様に消えていったわけであるが、初期近代英語期には、動詞自体は項を選択しないにもかかわらず所有者を目的語として示す、身体部位名詞を含む前置詞句を伴った EPC がかなり使用されていた。ただし、すべての非接触動詞が EPC をとり得たわけではない。次章では、ドイツ語とフランス語の対応形式を示しながら、3.1で「look, stare と gaze, ならびに glare と glower」、3.2で「smile と laugh」、3.3で「whisper と murmur」を取り上げて様々な角度から検証する。

3. 非接触動詞の EPC の共時的・通時的考察

3.1 look, stare と gaze, ならびに glare と glower

まず、視覚動詞から考察を始めることにする。最初に、英語の動詞 look で構成される IPC と EPC と、それらに統語的に対応するドイツ語とフランス語を示し、両言語の所有者の格を明らかにしておく。

- (19) a. She looked in **his** eye(s). (= (6a))
 b. She looked **him** in the eye(s). (= (6b))
- (20) a. Sie hat { in **seine** Augen / in **sein** Auge } { geschaut / gesehen }.
 b. Sie hat { **ihm** / ***ihn** } { in die Augen / ins Auge } { geschaut / gesehen }.
 him:DAT him:ACC
- (21) a. Elle a regardé dans **ses** yeux.
 b. Elle { ?**lui** / **l'** } a regardé dans les yeux.
 him:DAT him:ACC

視覚動詞は他動性が低いのでドイツ語・フランス語とも IPC でも使われるが、EPC で用いられた場合、外的所有者の格は前者では与格、後者では対格で標示される。ドイツ語ではその所有者を対格にすることはできず、フランス語ではそれを与格にすると非常に不自然な文になる。では、かつての EPC の名残と目されるこの英語の EPC の所有者を表す目的語は、かつては与格と対格の

⁸ Hüning (2008: 45) はオランダ語だけでなく英語でも可能としているが、オランダ語と英語では容認性に明らかに差がある。

⁹ See also Haspelmath (1999: 12).

どちらだったのであろうか。その答えは、「どちらでもなかった」である。なぜなら、Allen (2019:191) によると、与格と対格の区別があった古英語期における look や stare の EPC での使用例はまったくみられないからである。Allen (2019) は look, stare には単独で人間名詞を目的語としてとる他動詞用法が後期中英語期からあったことに着目し、「これらの表現は、与格外的所有者の遺物というよりはむしろ、後の時代に発達する look や stare の他動詞用法の遺物である」(Allen 2019:191) と示唆している。その見解は正しいと思われるが、これらの視覚動詞には構文での他動詞用法があることも関係しているかもしれない。単独では目的語をとらない動詞が構文においては目的語をとるという現象は、英語では他の構文、たとえば二重目的語構文や使役移動構文や結果構文においてもみられる。実際、他動性の高い接触動詞だけでなく、(22b) のように他動性の低い非接触動詞もまた結果構文で用いられる。

(22) a. Mary beat **him** (into silence).

b. Mary { looked / stared / glared / glowered } **him** *(into silence).

結局、英語では、格の消失後、動詞が人間名詞を目的語にとりうるものが EPC の構成要件になったため、それまでなかった視覚動詞の EPC がその他動動詞に伴って現れたということだと考えられる。

ここで、英語の視覚動詞の EPC は文字どおりの意味ではほとんど生産的でないことに着目しよう。そこでは前置詞句は in the eye(s) と in the face あとは between the eyes くらいしか用いられず、その目的語は人間以外では目・顔を見て語りかけることができるような動物に限られている。例外は、初出が16世紀初頭の次の格言である。これこそまさにかつての EPC の残滓である。

(23) Don't look **a gift horse** in the mouth.

'Don't complain about a gift.'

動詞 look で構成される EPC の制約については Wierzbicka (1988) や Fee & Hunt (1989) や Payne (1997) が言及してはいるが、我々としては、人間に対しては (23) の格言をもじってしか in the mouth もほとんど用いられないことを指摘したうえで、その例外的事例と有生名詞の目的語での生起可否について説明したい。この EPC は、IPC とは違い、次のように極めて制約が強い。

(24) a. She looked **him** { in the eyes / in the face / ?in the mouth / *in the ear / *on the lips }.

b. She looked { **the dog / the horse / ?the fish / ?the snail** } in the eyes.

さて、これに対応するドイツ語とフランス語の EPC にも同じような制約があるのだろうか。まず、英語の look に相当するドイツ語の schauen / sehen から成

る EPC と比べると、この英語の EPC の使用がいかに限定的であるかがわかる。次の (25) のドイツ語は (24) の英語に形式的に対応する EPC である。

- (25) a. Sie hat **ihm** {in die Augen / ins Gesicht / in den Mund / in die Ohren / auf die Lippen} {geschaut / gesehen}.
- b. Sie hat {**dem Hund / dem Pferd / dem Fisch / der Schnecke**} in die Augen {geschaut / gesehen}.

ドイツ語では身体部位にとくに制限はなく、前置詞は in 'in' だけでなく auf 'on' も用いることができるし、また人間以外の様々な生き物を身体所有者として与格で外的に示すことも可能である。では次に、対応するフランス語の EPC をみてみよう。注目すべきは、このフランス語の対格型の EPC には英語と同様の制約があるという点である。次の (26) のフランス語は (24) の英語に対応するものであるが、その容認性もまた完全に対応している。

- (26) a. Elle l'a regardé {dans les yeux / au visage / ?dans la bouche / *dans l'oreille / *sur les lèvres}.
- b. Elle a regardé {**le chien / le cheval / ?le poisson / ?l'escargot**} dans les yeux.

基本的には他動詞である regarder 'look at' から成る対格型 EPC では、前置詞句は英語同様 dans les yeux 'in the eyes' か au visage / à la figure 'in the face' あとは entre les yeux 'between the eyes' くらいしか用いられないし、動詞の目的語として使用可能な名詞も人間および家族的な動物に限られている。つまり、英語の look から成る EPC は、ドイツ語の自動詞 schauen / sehen で構成される与格型の EPC ではなくフランス語の他動詞 regarder で構成される対格型の EPC と制約を共有しているわけである。英語の視覚動詞の EPC は古英語の与格型 EPC を継承するものでないことは歴史的に明らかだが、意味的にも与格型ではなく、対格型である。構文的意味を担っているがゆえに、その EPC は対格型の EPC の意味的制約を免れないのである。

では、英語の視覚動詞から成る EPC には、前置詞句と目的語に関してなぜこれほど強い制約があるのだろうか。その理由は次のように考えられる。まず前提として、所有者を対格または直接目的語で標示する対格型 EPC はその刺激の知覚を前提としているので、(27a) のように、比喩的な意味しか持たない常套句を除くと、その対格ないし直接目的語は有情の存在または有情と信じられている存在でなければならないわけであるが、かつ前置詞句内の名詞は原則的に身体部位でなければならないわけであるが、接触動詞が用いられた場合は、他者からの打撃は身体であればどこに加えられても知覚されるため (27b) のように前置詞句の制約はさほど強くない¹⁰。

¹⁰ 対格型の EPC における動詞の種類による制約の微妙な差異については、武本 (1999) を参照されたい。

- (27) a. John kicked { **the man** / ***the table** } on the leg.
 (cf. John hit { **the nail** / ***the ship** } on the head.)
 b. John kicked **the man** { on the head / in the stomach / between the legs / *on the dog / *in the pillow }.

しかしながら、他者からの視線は身体のどこに注がれても知覚されるわけではなく、それを知覚できるのは「目」だけなので、「目」とそれからメトニミーによって「顔」のみが使用されるようになっているわけである。そして、この構文における目的語の指示対象としては、やはり刺激の知覚の有無が関与しているがゆえに、視線に反応するまたは反応すると信じられているような存在しか適さないのである。実際、「口」の場合は、次のような IPC を EPC にすると極めて不自然になる。

- (28) a. The dentist looked in (to) **the patient's** mouth.
 b. ? The dentist looked **the patient** in the mouth.

ただ、「口」などの他の身体部位が使用されることがないわけではない。まず、次のように、「目ではなく」ということが明示されている実例が散見されることに注意されたい。

- (29) I noticed that he always looked **me** in the mouth, not the eyes. (Graham Greene 1969, *Travels with My Aunt* (2010), p.249)

そして、明示されていなくても、「目ではなく」という含みがある場合にも他の身体部位が用いられるようである。次の in the mouth の使用例は、吃音のある主人公の独白である。

- (30) Growing up, I felt like half the time people were looking **me** in the mouth and they thought I was stupid.
 (Mark Batterson, Richard Foth, Susanna Foth Aughtmon 2015, *A Trip Around the Sun: Turning Your Everyday Life into the Adventure of a Lifetime*)

皆がしょっちゅう自分の口元を見ているような気がしていたということを言うためにとられたこの有標の表現は、他者の視線が普通でないことを強調する効果を生んでいると考えられる。また、次の事例も同様に、話す際に視線を(目・顔ではなく)胸元に注ぐということを表している。

- (31) He was so enthused about it that I forgave him his mullet (permed-in-back version) and his annoying habit of sometimes looking **me** in the chest when he talks.
 (Jen Sincero 2001, *Don't Sleep with Your Drummer*, p.38)

これらの EPC はいずれも、通常は相手の目を見て話す対面会話の場面で使用されており、その EPC は目以外の身体部位への異様な注視が知覚されていることを表している。したがって、これらの実例は、刺激の知覚を前提とする対格型 EPC の反例とはみなされない¹¹。

さて、視覚動詞の中でも今日 EPC で用いられるものと用いられないものがあるが、本節の最後に、考えられるその要因について説明することにする。(22b) で示した人間名詞を目的語にとりうる look, stare, glare, glower はいずれもかつては EPC で用いられていたわけだが、次のように、この中で glower だけは今では完全に IPC でしか用いられなくなっている。

- (32) a. She { looked / stared / glared / glowered } in **his** face.
b. She { looked / stared / glared / *glowered } **him** in the face.

Rohdenburg (2018: 89) による glare と gaze と grin と smile を合わせた統計調査では、“X in the face” と “in(to) X’s face” の合計数に占める “X in the face” の数は、16-17世紀：10/29, 18世紀：1/46, 19世紀：2/64, 1960年代-1993年：0/72 となっており、いずれの非接触動詞ももはやまったく EPC で用いられなくなっているというふうには受け取られかねないが、実際には glare の EPC は現代英語でも少なからず見受けられる。確かに gaze は類義の stare に比して明らかに EPC で用いられなくなっているが、glare は、Rohdenburg (2018) が取り上げていない類義の glower とは違い、後に示すとおり、今日でも EPC で用いられている。先に、近代英語期の gaze と glower の EPC の例を挙げておく¹²。

- (33) ... she gazed **him** full in the face, ... (NCF, 1861) (Rohdenburg 2018: 89)
(34) He complained, honest man, o’ a hole that glowered **him** in the face when he was ca’in at the Trenches.
(Grace Webster 1845, *The Disputed Inheritance* 2, p.8) (Google Books PDF)

では、視覚動詞の中でも、なぜ gaze や glower は EPC で用いられなくなり、look, stare および glare は今日まで EPC で使われてきたのであろうか。それは、gaze や glower の EPC はほとんど文字どおりの意味しか表してこなかったのに対し、look, stare, glare の EPC は文字どおりの意味だけでなく比喩的な意味も表してきたからだと考えられる。というのは、視覚動詞に関しては、比喩的な

¹¹ 一人称の me が用いられやすいのは、そのような視線は実感されやすいからであろう。ただ、一人称については「心性(的)与格」(ethical dative) と解釈されるうる事例もある。外的所有者と内的所有者の混成の場合がそうである。ティナ・ターナーの曲の歌詞の一節を引用する。“Look me in the heart / Look me in my heart, in my heart, in my heart” (Tina Turner 1989, *Look me in the heart*)

¹² *OED* (vi, 411) によると、詩的な語法だが、近代英語期の gaze には他動詞用法があった。

用法の場合には IPC より EPC がとられることのほうが圧倒的に多いからである。まず, look と stare の例を示す。現代英語では, gaze の EPC の比喩的用法は不自然である。

- (35) a. You should never { look / stare / ?gaze } **the sun** in the face.
b. I { looked / stared / ?gazed } **death** in the eye for the first time.

このように無情の存在や抽象的なものが目的語になっている場合は, 物理的にそれ(ここでは「太陽」や「死」)が「顔」や「目」の所有者であるわけではなく, 譲渡不可能所有の EPC の形式をとりながら慣用表現と化している¹³。そして, glower よりも多義的な動詞である glare もまた, とくに比喩的な意味を表す場合には EPC をとるようになっていく。以下に, 近代後期から現代にかけての glare X in the face の使用例を示す。(36)は「(人間・動物が顔を)睨む」, (37)は「(発光体が顔を)眩く照らす」という文字どおりの意味での用法, そして(38)は「(死や(好ましくない)事実・現実や証拠等が)眼前(顔前)に迫る, 鬱陶しがらせる」といった比喩的または換喩的な意味での用法である。

- (36) a. Thais was admitted into the Dining Room, and puffing thence into the Bed-Chamber, she open'd the Curtains, and glaring **him** in the Face told him she was come to haunt him for being the Cause of her Death by his barbarous Treatment. (John Oldmixon 1714, *The Court of Atalantis*, p.138) (Google Books PDF)
b. Lauren spun him around and glared **him** in the face.
(Collen Dixon 2002, *Behind Closed Doors... in My Father's House*, p.257)
- (37) a. If you're working during the day, try to introduce some natural light, since that's the best of all, but you don't want it glaring **you** in the face. (Georgene Lockwood 1988, *The Complete Idiot's Guide to Crafts with Kids*, p.18)
b. I extracted a Camel cigarette. I was about to flame the thing when a "No Smoking" sign glared **me** in the face. (Maurice S. Rawlings 2008, *Portrait of Jenny*, p.8)
- (38) a. Now Death, or something worse than Death, glared **us** in the Face, and most of us thought this the last day we had to live. (William Rufus Chetwood 1720, *The Voyages, Dangerous Adventures and Imminent Escapes of Capt. Rich. Falconer: Intermix'd with the Voyages and Adventures of Thomas Randal* (1734), p.143) (Google Books PDF)
b. I didn't like to reply; for my hideous Scottish accent glared **me** in the face the farther I receded from my native land, and I felt certain my indignant responses would have been received with laughter. (Charles Dickens 1850,

¹³ 文字どおりの意味でない場合には, 複数形の eyes よりむしろ単数形の eye が用いられる傾向がある。

- c. But a harsh reality glared **her** in the face. (Jordan Dane 2008, *No One Heard Her Scream*, p.179)
- d. But in spite of the facts glaring **him** in the face, Miller was troubled, for Grace Harte's hysterical indignation and vigorous denials rang true. (Elizabeth Elwood 2009, *The Beacon and Other Mystery Stories*, p. 293)

このように、今でも EPC をとりうる視覚動詞 look, stare, glare はその比喩的用法を持ち続けてきた。そして現代英語では、類義の stare と gaze ならびに glare と glower の間には、IPC に対する EPC の使用割合に顕著な差がある。それは有意な差で、比喩的用法の有無に起因するものである。一般に、ある表現形式の比喩的使用はその形式を凝固させる。look, stare および glare の EPC の慣用が、それらの EPC を特別に存続せしめたと考えられる。

3.2 smile と laugh

次に、動詞 smile と laugh の場合について考察しよう。まず smile であるが、この非接触動詞が身体部位名詞 face を含む in前置詞句とともに用いられる場合、現代英語ではIPCしか認められない。しかしながら、Rohdenburg (2018: 88-89)によると、16世紀から17世紀にかけては、smile は grin や sneer とならんで EPC でも使われていた。Rohdenburg (2018) は例示していないが、冒頭で挙げた (9) のほかに次のような例を挙げることができる。

- (39) a. Nor doth she euer smile **him** in the face, (Michael Drayton 1609, *Poems: by Michael Drayton, Esquire*, p.11) (Google Books PDF)
- b. I will Step in, and Smile **him** in the face, (Edward Taylor ca. 1680, *Edward Taylor's Gods Determinations and Preparatory Meditations* (2003), p.57)

ここで、英語の動詞 smile のIPCと EPC に対応するドイツ語とフランス語を提示し、それらの外的所有者の格を明らかにしておく。次のとおり、両言語ともその格は与格である。

- (40) a. She smiled in **his** face. (= (7a))
- b. *She smiled **him** in the face. (= (7b))
- (41) a. ?Sie hat in sein Gesicht gelächelt.
- b. Sie hat **ihm** ins Gesicht gelächelt.
him:DAT
- (42) a. ?Elle a souri à **son** visage.
- b. Elle **lui** a souri au visage.
him:DAT

ドイツ語の *lächeln* 'smile' とフランス語の *sourire* 'smile' は元々与格をとる動詞であり、英語とは逆に IPC での使用は不自然である。ただ、他者に微笑むという行為は言うまでもなく顔を見てのことなので、英語でも *smile at him* または *smile to him* で事足りるため、そもそも *smile* の例はあまり多くない。伝えるべき情報として顔に言及する場合は、たとえば *smile { in(to) / at } his anxious face* のように形容詞を伴っていることがある。この場合、ドイツ語やフランス語では構文の交替が起こる。与格を持つ言語では身体部位名詞に何らかの修飾語が付くとその所有者を与格標示できなくなることはよく知られているが、その場合は IPC でしか表せない。たとえばフランス語では、IPC の *sourire à son visage* はほとんど使われないが、顔の個別的情報を伝える必要がある場合には、次のように EPC ではなく必ず IPC がとられる。

- (43) a. Elle a souri à **son** visage inquiet.
 she has smiled to his face anxious
 'She smiled in(to) his anxious face.'
- b. *Elle **lui** a souri au visage inquiet.
 she him:DAT has smiled to-the face anxious

smile が EPC で用いられなくなっている英語では、当然このような構文交替は起こり得ない。

一方、*smile* とは少し異なり、*laugh* の EPC での使用は、現代でもアメリカ英語では絶対に不可というわけではないようである。形式的に対応するドイツ語・フランス語の例と合わせて示す。

- (44) a. She laughed in **his** face.
 b. ?She laughed **him** in the face.
- (45) a. *Sie hat in **sein** Gesicht gelacht.
 b. Sie hat **ihm** ins Gesicht gelacht.
 him:DAT
- (46) a. *Elle a ri { à **son** visage / à **son** nez }.
 b. Elle **lui** a ri { au visage / au nez }.
 him:DAT

もちろん英語では *laugh* は通常 IPC で使われるわけであるが、逆に、ドイツ語・フランス語では *lachen* 'laugh', *rire* 'laugh' は EPC で用いられ、それらの IPC は *lächeln* 'smile', *sourire* 'smile' の IPC よりもさらに容認度が低く、実際に使用されることはない。それは、いずれの言語でも EPC は文字どおり「顔を見て笑う」という意味だけでなく「ばかにする」という意味も持っており、与格の用法に関与的な affectedness が高いからである。なお、(46b) のように、フラン

ス語では「顔」よりもむしろ「鼻」のほうが慣用的によく使われる。では、かつては laugh だけでなく smile も EPC で用いられていたのはなぜなのだろうか。それは、前節で取り上げた視覚動詞と同様に、これらの非接触動詞も EPC の構成要件を満たしていたからだと考えられる。つまり、smile も laugh も単独では人間名詞を目的語としてとれないが、構文においてはとれていたということである。いずれの動詞も、今でも次のように使役移動構文や結果構文では目的語をとって用いられる。

- (47) a. She smiled **him** { out / out of his anger }. (cf. *She smiled **him**.)
 b. He laughed **himself** { into a stupor / silly }. (cf. *He laughed **himself**.)

ただ、smile の EPC と laugh の EPC はまったく同じ歩調で衰退の一途を辿ってきたわけではない。Rohdenburg (2018: 89) は、アメリカ人のインフォーマントが laugh はアメリカでは今でも EPC で使われることがあるだろうと証しているとして、smile や grin 等とは同列に扱っていない。実際、Google Books での検索でも、laugh の EPC は smile の EPC よりはるかに多くみられ、19世紀までかなり使用されていたことが見て取れるし、20世紀の使用例も散見される。次の(48a)はイギリスの詩人兼作家 George Allen Upward (1863-1926) の1905年刊行の小説における実例、(48b)はアメリカの西部劇作家 Frederick Feikema Manfred (1912-1994) の1957年刊行の小説における実例である。そして、(48c)はアメリカのファンタジー作家 Deborah Turner Harris (1951-) の1994年の作品における文字どおりでない用例である。

- (48) a. I knew that these simple, law-abiding citizens would laugh **me** in the face if I told them that they were in danger from the warships of a foreign Power.
 (George Allen Upward 1905, *The International Spy: Being the Secret History of the Russo-Japanese War*)
 b. Harry shrugged off Jesse's arm. He laughed **him** in the face.
 (Frederick Feikema Manfred 1957, *Riders of Judgment* (2014))
 c. If we fail, then we'll laugh **death** in the face and spit in the eye of the Bering king, and let our children sing about that for as long as men still drink to courage. (Deborah Turner Harris 1994, *Caledon of the Mists*, p.95)

確かに現代英語では“laugh in the face of death”のほうがよく使われるようになってはいるが、このように“laugh death in the face”も現に今なお使われている。

非接触動詞の EPC の衰退は総じて後期近代英語期に一気に進むが、laugh の EPC は smile の EPC よりもずっと生き延びてきた。つまり、EPC の IPC への収斂は smile よりも laugh のほうが緩やかだったわけである。このことは、glower の EPC よりも glare の EPC のほうが使われ続けてきたことと並行している。そ

れは, glower の EPC とは違い, glare の EPC が文字どおりでない意味も担ってきたように, smile の EPC とは違い, laugh の EPC も文字どおりでない意味も担ってきたからである。laugh の場合も, その EPC の慣用的使用が IPC への移行のブレーキになってきたとみて間違いないであろう。

3.3 whisper と murmur

最後に, whisper と murmur の場合について検証する。冒頭で触れたように, whisper は今の英語では IPC でしか用いられないが, かつては EPC でも使われていた。Rohdenburg (2018: 88) によると, whisper は18世紀までは EPC でも使用され, 17世紀まではその構造で直接目的語をとることもあった。Rohdenburg (2018) の例を借りる。

- (49) a. ...; when one who sate by him whisper'd **him** in the Ear, and ... (ECPF, 1555)
(Rohdenburg 2018: 87)
- b. ... when a Messenger ... whisper'd **them** something in the Eare, ... (ECPF, 1655)
(Ibid.)

さて, ここでその現代英語の用法をフランス語・ドイツ語の相当語の用法と対比してみよう。両言語とも, その動詞は他動性が低いので IPC をとることも可能であるが, それぞれ元々与格をとる動詞であり, 比較的 EPC をとることが多い。その場合の外的所有者はもちろんとともに与格で標示される。

- (50) a. She whispered (something) in **his** ear. (≈ (8a))
b. *She whispered **him** (something) in the ear. (≈ (8b))
- (51) a. Sie flüsterte (etwas) in **sein** Ohr.
b. Sie flüsterte **ihm** (etwas) ins Ohr.

him:DAT

- (52) a. Elle chuchota (quelque chose) à **son** oreille.
b. Elle **lui** chuchota (quelque chose) à l'oreille.

him:DAT

そして, 英語では murmur も IPC でしか用いられないが, ドイツ語・フランス語ではそれに相当する動詞もまた IPC でも EPC でも使用可能である。

- (53) a. She murmured (something) in **his** ear.
b. *She murmured **him** (something) in the ear.
- (54) a. Sie murmelte (etwas) in **sein** Ohr.
b. Sie murmelte **ihm** (etwas) ins Ohr.

him:DAT

- (55) a. Elle murmura (quelque chose) à **son** oreille.
 b. Elle **lui** murmura (quelque chose) à l'oreille.

him:DAT

(50)-(55)の共時的対比は、今日の英語では whisper も murmur も同じように、ドイツ語やフランス語で可能な EPC がとれないということを示しているのだが、これが現代ではなく初期近代英語期の共時的対比だとすると、whisper に関してはアステリスクが外れることになるが、はたして murmur のほうもそうなるのだろうか。Rohdenburg (2018) は、初期近代英語では whisper の他に whister, whistle, buzz も EPC で使用されていたことを指摘しているが、murmur についての言及はない。そこで、Google Books で検索してみると、近代英語期の whisper の EPC での使用例はかなりみられるにもかかわらず、murmur の EPC での使用例は、異形態も含めて調べてみてもまったく見当たらない。かつて whisper は EPC をとっていたのに murmur のほうはとっていなかったことは、これらに相当する動詞が両方とも EPC で用いられるドイツ語やフランス語の側からみると妙に思われる。murmur は14世紀末に使われるようになった古フランス語からの借用語ではあるが、類推作用が働いて本来語の whisper と同じように EPC でも用いられるようになっていてもよさそうだが、そうはならなかった。なお、murmur と類義の mutter (< 中英語 moteren 14世紀初) や mumble (< 中英語 momelen 14世紀初) や grumble (< フランス語 grommeler 16世紀末) も、いずれも IPC の実例は多数みられるのに、EPC での使用例はまったくみられない。では、なぜ whisper が EPC をとっていて murmur 等とはとっていなかったのだろうか。それは、やはり人間名詞を目的語としてとる他動詞用法があったかどうかの違いに起因していると考えられる。現代英語では、発話様態動詞 (manner-of-speaking verbs) に分類される whisper も murmur 等も人間名詞を目的語としてとることはできず、二重目的語構文を構成することもできない (see Pinker 1989: 112, Goldberg 1995: 124.)。

- (56) a. She { whispered / murmured / muttered / mumbled / grumbled } **to him**.
 b. *She { whispered / murmured / muttered / mumbled / grumbled } **him**.
 (57) a. She { whispered / murmured / muttered / mumbled / grumbled } something **to him**.
 b. *She { whispered / murmured / muttered / mumbled / grumbled } **him** something.

これでは、現代英語の観点からはかつての whisper と murmur の EPC での使用の可否を説明することはできないので、近代英語期の共時的視点をとる必要がある。実は、現代英語では非文法的であるが、かつては whisper だけは前置詞

to なしで人間名詞を直接目的語としてとっていた。OED に記載されている次のような用例から、whisper は遅くとも16世紀末から19世紀末に至るまで他動詞としても用いられていたことがわかる。

- (58) a. He will whisper **the poore** howe they shall come by riches. (1599 H. SMITH *Serm., Satan's Compass.* (1592) 988) (OED xx, 255)
- b. Miss Jane .. whispered **her sister** to observe how jealous Mr. Cheggs was. (1840 DICKENS *Old C. Shop* viii) (OED xx, 255)
- c. The Lord Mayor whispered **the Judge** again. (1898 BESANT *Orange Girl* II. xxi) (OED xx, 255)

そして、「近代小説の父」と言われる Samuel Richardson の作品には (59) のように自動詞用法と他動詞用法がかなり混在している。また、(60) のような受動文も見受けられる。

- (59) a. She whispered **to me**, that she did; and made me a very high compliment on my behaviour. (A822.04 Beagle Library: Richardson, Samuel. 1781. *The history of Sir Charles Grandison.* 7 vols. London: Strachan. Volume 4. p.48)
- b. She whispered **me**, that the doctor had expressed fears for her head, if she were not kept quiet. (A822.01 Beagle Library: Richardson, Samuel. 1781. *The history of Sir Charles Grandison.* 7 vols. London: Strachan. Volume 1. p.197)
- (60) Sir Charles joining us O Sir, said I, why was **I** not whispered to withdraw with you... ? (A822.07 Beagle Library: Richardson, Samuel. 1781. *The history of Sir Charles Grandison.* 7 vols. London: Strachan. Volume 7. p.35)

当時は、whisper の受動化が可能なほどその他動詞用法が定着していたわけである。18世紀の whisper の二重目的語構文での使用に関しては先行研究に言及がある。Coleman & De Clerck (2011) は次のような明らかなその二重目的語構文での使用例も挙げて、「データは、whisper の二重目的語構文用法は近代英語のもっと早い段階ですっかり確立していたことを示している」(Coleman & De Clerck 2011: 198) と指摘している。

- (61) a. At her departure she took occasion to **whisper** me her opinion of the widow, whom she called a pretty idiot. (Fielding, 1751) (Coleman & De Clerck 2011:198)
(太字強調も Coleman & De Clerck 2011)

英語は歴史的に自動詞の他動詞化がかなり起こった言語であるが、結果的にそうならなかったものの、whisper にもその兆候があった。そして、whisper は EPC を構成してもいた。それに対して、murmur 等には人間名詞を目的語にと

る他動詞化は起こらなかった。そして、それらの動詞は EPC を構成することもなかった。要するに、whisper は EPC を構成する要件を満たしていたのに対して、murmur 等はその要件を満たしていなかったのである。

ところで、しかるにドイツ語やフランス語ではなぜ英語の whisper に相当する動詞だけでなく murmur に相当する動詞でも EPC がとられるのだろうか。その理由は明白である。それは、両言語のそれらの動詞の EPC はいずれも与格型だからである。それに対して、おそらく後期中英語期に出現した look の EPC が与格型ではなかったように、当時の whisper の EPC も与格型ではなかったとみなしうる。ただ、比較的その使用は少なかったが、whisper の EPC には所有者を to 前置詞句で示す形式もあった。whisper に固有のこの前置詞与格 EPC がいつごろから使われだしたのかは不明だが、18世紀初頭にはその使用例が認められる。

- (62) until a Quaker that was next to him, whispered **to him** in the Ear, and bid him ask me, (George Keith 1706, *A Journal of Travels from New-Hampshire to Caratuck, on the Continent of North America*, p.10) (Google Books PDF)

前置詞与格自体は古英語の与格に由来しているわけであるが、この前置詞与格 EPC はおそらく目的語 EPC の後発形式だと思われる。というのは、この形式はさほど古い時代にはみられず、元々そこに to がなかったのに後に書き加えられている事例がいくつか見出されるからである。金子 (2020) が英語にみられる EPC として挙げている (63b) の例もそうである。その出典のオリジナル版では (63a) のように to は入っていない。つまり、原著者 Joseph Addison (1672-1719) は1711年に目的語の EPC を用いていたのだが、それを引用した Joseph Wood Krutch によって1961年に前置詞与格の EPC に書き換えられていたということである。

- (63) a. At the same time he whispered **me** in the Ear to take notice of a Tabby Cat that sat in the Chimney-Corner, (Joseph Addison 1711 *The Spectator* (1718), p.129) (Google Books PDF)
- b. At the same time he whispered **to me** in the ear to take notice of a tabby cat that sat in the chimney corner,
<https://books.google.co.jp/books?id=6yAuDwAAQBAJ&pg=PT319> (金子 2020: 53)

なお、次の注釈から、原書の *The Spectator* におけるこの whisper の目的語 EPC は、1869年にはすでに古めかしくなっていたことがわかる。

- (64) ‘Whispered me in the ear.’ ‘Whispered to me,’ or ‘Whispered in my ear’ is more modern. (*Text-book in the English Language for December 1869: Containing Addison’s*

他にもあるが、同様の書き換え事例をもう1つだけ挙げておく。次の場合も、1654年の記録では to はなかったのに、アメリカの歴史家 David D. Hall (1936-) による引用では括弧つきで to が書き加えられている。

(65) a. goodwife Baldwin whispered **her** in the eare

(New Haven (Conn.); Hoadly, Charles J. 1858, *Records of the colony or jurisdiction of New Haven, from May, 1653, to the union. Together with New Haven code of 1656*, p.86.) (Internet Archive)

<https://archive.org/details/recordscolonyor01congoog/page/n9/mode/2up?q=whispered>

b. Goodwife Baldwin whispered [**to**] **her** in the ear

(David D. Hall 2005, *Witch-Hunting in Seventeenth-Century New England: A Documentary History 1638-1693, Second Edition*. p.83)

このような書き換えは、whisper の他動詞用法がなくなったためにとられたものであり、whisper X in the ear よりも whisper to X in the ear のほうがまだ許容できるということでの措置なのだろう。この動詞の EPC は次のような経緯を辿ってきたと考えられる。whisper は近代英語期には前置詞 to を介さない他動詞用法を持っていて EPC でも用いられていたが、EPC の構成要件である他動詞用法を失うにつれて EPC で用いられなくなっていった。その本来の EPC の衰退過程で、whisper は前置詞 to を介して人間名詞をとることはずっとできていたので、代替形式の前置詞与格 EPC が出現した。それでも、純然たる他動詞の EPC 以外は廃する方向に進んできた英語において、今ではやはりその変種の EPC も近代ほどは使われなくなっている。実際、whisper の前置詞与格 EPC は容認されるものの、敢えて IPC の代わりに使われることはほとんどない。本稿で取り上げたかつて存在した英語の非接触動詞の EPC がすべて後期中英語期以降に発達した、対格型を基盤とする目的語型であるならば、whisper の前置詞与格 EPC は古英語の与格 EPC の末裔ではなく、目的語 EPC のヴァリエーションということになるが、断定するには更なる詳細な通時的検証を要する。

4. おわりに

本稿では、単独では人間名詞を目的語としてとらない英語の非接触動詞の EPC について、先行研究から得られた知見を援用しながら多角的に論じた。我々の当初の疑問はとくに次の3点であった。1. 英語に現存する視覚動詞の EPC および近代まで存在した他の非接触動詞の EPC は与格型と対格型のどちらのタイプなのか。2. なぜそれらの非接触動詞の EPC はあって、他の類義の

非接触動詞の EPC はなかったのか。3. なぜかつて可能だった EPC のごく一部だけが今日まで存続することになったのか。これらの疑問は、通時的かつ共時的視点をとって分析・考察することによりかなり解かれたように思われる。

1点目については、古英語期にあった spit の与格 EPC が近代英語期にはほとんどみられなくなっていたこと、look や stare で構成される EPC が古英語期には存在せず、意味的にはむしろ対格型であること、whisper の EPC が人間名詞を直接目的語にとる他動詞用法の消失とともに消え去ったことから、初期近代英語期に多用されていた非接触動詞の EPC は、すでに確立していた、接触動詞の対格型 EPC に基づいた目的語型 EPC への構造的適用によって生じたものだったとみるのが妥当であろう。2点目については、1点目に見出されたことと関係しているが、近代英語期に人間名詞を直接目的語としてとっていた whisper の EPC はあったのに対し、その用法を持っていなかった murmur 等の EPC はなかったことから、EPC での使用が可能な非接触動詞と不可能な非接触動詞があったのは、人間名詞を目的語にとりうるものが当時の EPC の構成要件になっていたからだと言えるだろう。そして3点目については、後期近代英語期に一気に非接触動詞の EPC を廃する方向に向かった英語において生き延びてきた look や stare や glare で構成される EPC、そして消滅しかけている laugh から成る EPC が文字どおりでない意味も持っていることから、一部の非接触動詞の EPC の存続は、慣用表現化に必然的に伴う形式の凝固に起因しているとみなすことができよう。

その凝固現象の最たるものは比喩的な意味でしか使われない “Don't look a gift horse in the mouth.” なので、最後に、翻訳借用をめぐる注目すべき点を指摘して本稿を閉じることにする。この英語の諺の元々の由来は、(66a) の紀元400年ごろの聖ジェローム訳の新約聖書中の一書『エフェソの信徒への手紙』の序文の記述にあるとされているが、ヨーロッパ諸語で使われている似たような諺の多くは (66b) のヴァージョンからの翻訳借用のようである。

(66) a. **Equi donati dentes non inspicuntur.**

(St. Jerome ca. 400, *Epistle to the Ephesians*)

horse:GEN given teeth:NOM not be inspected

lit. 'A given horse's teeth are not inspected.'

b. { Noli / Non oportet } **equi dentes inspicere donati.**

may you not not you should horse:GEN teeth:ACC inspect given

lit. { 'Don't / 'You shouldn't } inspect a given horse's teeth.'

このことに関してとくに我々の関心を惹くのは、元のラテン語では「馬」が属格の IPC であったにもかかわらず、大半の言語でそれが与格または前置詞与格の EPC になっているという事実である。また、ラテン語では「歯」が対格

で標示されていたが、ロマンス諸語やバルト・スラヴ諸語では総じて「歯」がそのまま対格または直接目的語で表されているのに対して、ゲルマン諸語では一様に「口」が前置詞句の目的語で示されているという語派間の相違もある。これは単なる名詞の言い換えに過ぎないのではなく構造的な変換であり、EPCで許される統語構造が語派によって異なっていることを示唆するものである。フランス語でもドイツ語でもそれぞれ少し違った言い回しがいくつかあるが、もっとも普及しているものを例示する。

- (67) a. **À cheval donné** on ne regarde pas **les dents**.
 to horse given one not look at NEG the teeth
 'Don't complain about a gift.'
- b. **Einem geschenkten Gaul** { schaut / sieht } man nicht **ins Maul**.
 a:DAT gifted horse look look one not in-the mouth
 'Don't complain about a gift.'

諸言語の翻訳借用には、格の有無だけでなく、言語によって異なるEPCの構造上の制約と主題の表現方略の違いが関与していると思われる。詳しくは次稿で論じることとする。

【参考文献】

- Allen, C. L. 2019. *Dative external possessors in early English* (Vol. 39). Oxford University Press.
- Allen, Cynthia L. 2023. What Did (n't) Happen to English?: A Re-evaluation of Some Contact Explanations in Early English. *SELIM. Journal of the Spanish Society for Medieval English Language and Literature*. 28.1. 19-38.
- Bruno, Laura, & Peter Alexander Kerkhof. 2020. Bodily Injuries and Dative Experiencers in Old Frisian. *Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik* 79.4. 485-516.
- Colleman, Timothy & Bernard De Clerck. 2011. Constructional semantics on the move: On semantic specialization in the English double object construction. *Cognitive Linguistics* 22.1. 183-209.
- Eik, Ragnhild. 2014. Setningar med possessivt objekt i norsk: Ein nykonstruksjonistisk analyse av setningar som "ho trakkta han på foten". MA thesis. NTNU.
- Fee, E. Jane & Kathryn Hunt (eds.). 1989. *Proceedings of the 8th West Coast Conference on Formal Linguistics*. Vol. 8. Center for the Study of Language (CSLI).
- Filppula, Markku & Juhani Klemola. 2014. Celtic influences in English: A re-evaluation. *Neuphilologische Mitteilungen*. 33-53.
- Goldberg, Adele Eva. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Haspelmath, Martin. 1999. External possession in a European areal perspective. *Typological studies in language* 39. 109-136.
- Hünig, Matthias. 2008. Hoe talen elkaar ontmoeten: over taalcontact en convergentie. *KALLA, Irena Barbara-CZARNECKA, Bożena: Neerlandistische ontmoetingen. Trefpunt Wrocław. Wrocław*. 40-53.
- 池上嘉彦. 1993. <有情の被動者としての人間>の文法. *Sophia Linguistica Working Papers in Linguistics* 33. 上智大学. 1-19.
- 金子真. 2020. フランス語と英語における、3つのタイプの動詞の必須項でない与格について. 『青

- 山フランス文学論集』 29. 46-75.
- König, Ekkehard & Martin Haspelmath. 1998. Les constructions à possesseur externe dans les langues d'Europe. In Jack Feuillet (ed.) *Actance et valence dans les langues de l'Europe*. Berlin: Mouton de Gruyter. 525-606.
- Lacalle, Miguel. 2022. Old English verbs of depriving: the semantics and syntax of possession transfer. *Studia Neophilologica* 94.1. 32-58.
- Lamiroy, Béatrice, & Nicole Delbecque. 1998. The possessive dative in Romance and Germanic languages. *The dative*. 2. 29-74.
- Lamiroy, Béatrice. 2003. Grammaticalization and external possessor structures in Romance and Germanic languages. *From NP to DP*. 2. 257-280.
- Lødrup, Helge. 2009. Looking possessor raising in the mouth: Norwegian possessor raising with unergatives. In *Proceedings of the LFG09 Conference*. 420-440.
- Lødrup, Helge. 2019. The accusative external possessor with Norwegian unergatives. *Argumentum* 15. 561-574.
- Lundquist, Björn & Gillian Ramchand. 2012. Contact, animacy, and affectedness in Germanic. In Peter Ackema, Rhona Alcorn, Caroline Heycock, Dany Jaspers, Jeroen van Craenenbroeck, Guido Vanden Wyngaerd (eds.). *Comparative Germanic syntax. The state of the art* 191. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins. 223-248.
- Luraghi, Silvia. 2020. External possessor constructions in Indo-European. *Reconstructing syntax*. Brill. 162-196.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax: Part 1 Parts of speech*. Helsinki: Société Néophilologique.
- Payne, Doris L. & Immanuel Barshi. 1999. External possession: What, where, how, and why. In Doris L. Payne & Immanuel Barshi (eds.) *External possession*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 3-29.
- Pinker, Steven. 1989. Learnability and cognition: *The acquisition of argument structure*. MIT press.
- Rohdenburg, Günter. 2018. On the differential evolution of simple and complex object constructions in English. In Hubert Cuykens, Hendrik De Smet, Liesbet Heyvaert & Charlotte Maelkerbergh (eds.) *Explorations in English historical syntax*. Amsterdam: John Benjamins. 77-104.
- Strauss, Emanuel. 2012. *Dictionary of European proverbs*. Routledge.
- Simpson, John & Edmund Weiner (eds.). 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edn. Oxford: Oxford University Press.
- 武本雅嗣. 1999. 対格構文と与格構文について—慣習化された身体表現の共通性と多様性—。『言語研究の潮流』。開拓社。 131-146.
- 武本雅嗣. 2002. 概念化と構文拡張—中心的与格構文から周辺の与格構文へ。『シリーズ言語科学 4 対照言語学』生越直樹 (編)。東京大学出版会。 99-122.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1992. Syntax. In Richard M. Hogg (ed.) *The Cambridge history of the English language: Vol. 1 The beginnings to 1066*, 168-289. Cambridge: Cambridge University Press.
- Van de Velde, Freek & Béatrice Lamiroy. 2016. External possessors in West Germanic and Romance: Differential speed in the drift toward NP configurationality: (Inter) Subjectification and Directionality. In D. Olmen, H. Cuyckens, L. Ghesquière (eds.) *Aspects of grammaticalization: (inter)subjectification, analogy and unidirectionality*. Berlin: Mouton de Gruyter, 353-399.
- Vennemann, Theo. 2002. On the rise of 'Celtic' syntax in Middle English. In Peter J. Lucas & Angela M. Lucas (eds.) *Middle English from tongue to text: Selected papers from the Third International Conference on Middle English: Language and Text, held at Dublin, Ireland, 1-4 July 1999* (Studies in English Medieval Language and Literature 4). Bern: Peter Lang. 203-34.
- Wierzbicka, Anna. 1976. Mind and body. In J. McCawley (ed.) *Syntax and Semantics 7. Notes from the Linguistic Underground*, 129-157. New York: Academic Press.